

| | |
|---------|--------------------------------------------|
| 氏名 | 李紫娟 |
| 授与した学位 | 博士 |
| 専攻分野の名称 | 文学 |
| 学位授与番号 | 博甲第 5245 号 |
| 学位授与の日付 | 平 27 年 9 月 30 日 |
| 学位授与の要件 | 社会文化科学研究科社会文化学専攻 (学位規則第 5 条第 1 項該当) |
| 学位論文の題目 | 呼びかけの言語行為についての研究 |
| 論文審査委員 | 教授 宮崎 和人 教授(特任) 辻 星児 准教授 堤 良一 准教授 中東 靖恵 |

学位論文内容の要旨

本研究は、日本語のコミュニケーションにおける、呼びかけの言語行為について、多面的な考察を行ったものである。

第 1 章「序論」では、本研究の出発点と目的、本研究の立場、研究対象、研究資料、研究方法および本論文の構成を述べ、第 2 章「呼びかけ語の研究史」では、日本語の呼びかけ語の研究史を概観した。呼びかけ語は、インド・ヨーロッパ語などでは、古くは名詞の格変化の中で呼格 (vocative) という独立した扱いを受けていた。日本語では、つとに山田 (1908) が喚体句の中心をなす名詞を「呼格」と呼んでいることが注目される。その後、一語文の研究や社会言語学的な研究、談話語用論的な研究において、呼びかけ語への言及が見られるが、言語研究におけるその位置づけは周辺的であり、本格的な研究はまだないといってよい。呼びかけるという行為はあまりにも単純で、他の言語行為に比して、さほど分析の必要性がないと考えられているのかもしれない。しかし、呼びかけ行為は、言語の発生時から存在していた言語行為であると考えられ、言語の機能の分化と発達を考察する上で、きわめて重要な手掛かりを提供してくれる研究対象である可能性がきわめて高いのである。本研究では、呼びかけの言語行為に使用される単語を広く呼びかけ語と呼び、ドラマや映画のセリフから大量に収集した使用例を分析対象とした。

第 3 章～第 6 章が本論である。第 3 章と第 4 章は、一語文としての呼びかけ語についての考察であり、第 5 章と第 6 章は、他の文と共起した場合の呼びかけ語についての考察である。後者は、一般に独立語と言われているものであるが、本研究では、一語文 (独立語文) と独立語 (文の成分) という文法論的な区分に替えて会話分析的な区分を採用する。すなわち、呼びかけ語だけでターンを構成するものを呼びかけ一語文、そうでないものを独立語と見なしている。

第 3 章「呼びかけ一語文について」では、「呼びかけ一語文」としての呼びかけ語が対人的な使用においてどのような意味を実現しているかといったことを考察した。一見、呼びかけ一語文には、決まった意味がなく、状況や文脈によって、その場その場でランダムに意味が生じているように見えるが、用例分析の結果、大きくは、「働きかけ的なもの」と「受け手的なもの」のいずれかになることが明らかになった。呼びかけ一語文とは、要するに、一語文としての呼びかけ語であるから、そこには呼びかけ語的な意味 (喚起) と一語文的な意味 (気づき・驚きなど) とが重ねられているわけであるが、実際の使用においては、そのいずれかの側面が前面化しており、呼びかけ一語文の様々な意味は、受け手性の

強弱、働きかけ性の強弱のスケールの上に位置づけることができる。

第4章「呼びかけ一語文におけるイントネーションの型と意味」では、前章の議論を踏まえ、呼びかけ一語文において、イントネーションの型がどのような機能をはたしているかについて考察した。まず、働きかけ的な呼びかけ一語文のイントネーションについて分析した結果、その型は、大きく、[上昇調イントネーション]と[下降調イントネーション]に分かれ、[上昇調イントネーション]を用いるのは、話し手の意向と聞き手の意向の間に矛盾が存在していないと話し手が考えている場合の働きかけであり、[下降調イントネーション]を用いるのは、話し手の意向と聞き手の意向の間に矛盾が存在していると話し手が考える場合の働きかけであることが分かった。一方、受け手的な呼びかけ一語文のイントネーションは、大きく、[下降調イントネーション]と[平調イントネーション]に分かれ、気づきや驚きに代表される感嘆文的な使用の場合は[下降調イントネーション]を用い、その場で認識したことに感情的評価を与える場合は[平調イントネーション]を用いることが分かった。

第5章「独立語としての呼びかけ語」は、独立語としての呼びかけ語の機能についての考察である。ここでは、呼びかけ語の出現位置に着目するが、それは文頭・文中・文末といった文に対する位置ではなく、セッションの開始時やターンに対する位置である。まず、セッション開始時に用いられる呼びかけ語は、「相手を確認する」「話し手の存在を相手に気づかせる」「複数のメンバーから特定の相手を指定する」といった機能をもつ。次に、ターンの冒頭に位置する呼びかけ語は、「話題をかえる」「相手を戒める」「真剣な話をする前置き」「あらたまり」といった働きをもつ。ターンの末尾に位置する呼びかけ語は、「追及する」「念押し」「忠告する」「親しみを表す」といった機能をもつ。これらの機能は、呼びかけ語が相手の発話と自分の発話の間に位置することの意味に注目することによって初めて明らかになるものである。

第6章「独立語文と共起する呼びかけ語について」は、村木(2012)による感動詞の分類に基づいて、呼びかけ語が、どのようなタイプの感動詞と、どのような位置関係で共起し、どのような意味を実現するか、ということについて調査した。感動詞は大きく、「Ⅰ聞き手の存在を前提としない感動詞」と「Ⅱ聞き手の存在を前提とする感動詞」に分かれるが、呼びかけ語が共起するのは、Ⅰの「(話し手の事態に対する)感動」(感覚的な感動)と、Ⅱの「話し手から聞き手への対応」(気持ちの表し、呼びかけ、勧め、挨拶)であった。感動詞の意味によって呼びかけ語との位置関係が決まっていること、また、位置が変わると呼びかけ語の意味が変わることも明らかになった。

第7章は、本研究の全体的なまとめを行い、今後の課題を述べた。

論文審査結果の要旨

審査会は、2015年7月1日（水）の17時50分より19時20分まで言語系セミナー室において開催された。審査委員の構成は、予備論文のそれと同じであり、指導教員の宮崎、副指導教員の辻特任教授、堤准教授ほかに、社会言語学・音声学の専門家として中東准教授に加わっていただいた。

提出された論文の分量は、A4で121枚、約174,200字である。関連業績としては、本論文の中心的な章を構成する個別論文を4編公表し、国際学会での研究発表が1件ある。予定から1年半遅れての学位申請となったが、これは、予備論文において未完成であった章の論じ方を途中で大きく変え、第6章を追加することにしたためである。

本論文は、呼びかけの言語行為についての研究であり、呼びかけ語（呼びかけの言語行為に使用される単語を広く含む）を使用して人間が何をしているかということをも明らかにすることがその目的である。そのため、小説を使用した予備調査の後には、テキストではなく、場面をデータベース化し、分析対象としている。様々な場面を類型化し、データベース化するには、自然談話を対象にするのは現実的でないため、申請者は、テレビの連続ドラマ2作品（各8回分）から、呼びかけ語が使用されるすべての場面の映像・音声を保存して、トランスクリプトを作成し、一々場面情報を付与している。また、4編の映画のシナリオを補助資料として用いている。

呼びかけ語に関する先行研究はあまりなく、文法論では独立語や独立語文の一部として簡単に言及されるにとどまり、社会言語学における呼称語の研究には見るべきものがあるが、代名詞用法が中心である。一語文の研究や感動詞の研究には参考になるものがあるが、呼びかけ語の研究の枠組みや方法論を示したものはなく、それらは申請者自身が考案することとなった。この点に関して、本論文では、呼びかけ語の、一語文としての性質（第3、4章）、会話分析の単位であるターンのレベルで捉えたときの機能（第5章）、他の独立語文との共起関係（第6章）という、非常に斬新な切り口を用意し、呼びかけ語の意味と機能の多様性と普遍性に光をあてようとしている。こうした試みによって、従来、あまり論じることがないかに見えていた呼びかけ語の研究に、大きな展望が開けたといえる。以下、本論にあたる章について、こうした試みが具体的にどのように実践されているかについて解説し、評価を述べる。

本論文の第3章は、呼びかけ語だけでできた文、すなわち呼びかけ一語文が単に呼びかけの意味だけをもつのではないということ、かといって、状況や文脈によって数限りない意味が表されるわけでもないことを明らかにしている。すなわち、呼びかけ一語文の意味は、働きかけのか受け手のどちらかである。喚起と感嘆を両極とするスケールの上に各種の意味を位置づける試みは、言語機能論の観点からも注目される。なお、内部構造をもたない一語文の構文論的な特徴は、イントネーションに求められる。第4章では、ドラマのセリフのイントネーションを模倣した音声をソフトウェアで解析し、第3章で記述した呼びかけ一語文の意味をイントネーションの観点から類型化している。イントネーションが呼びかけ一語文の意味のどの側面で働いているのかを明らかにしている点に意義が認められる。

第5章は、従来、文一文法の立場から、文の成分としての独立語として理解されてきた呼びかけ語をまったく新しい視点から捉えなおしている。文一文法では、呼びかけの独立語を文に付属するものと見ているが、本論文では、セッション開始時やターンといった、より大きな単位の中で見ることによって、従来の研究には見えなかった、呼びかけ語の機能の発見に成功している。

第6章は、予備論文の提出後に補った章であり、感動詞と呼びかけ語のコンビネーションという応用的な課題に取り組んでいる。考察はシンプルで、共起する感動詞の種類については目新しいものはないが、位置関係が固定されているペア、位置関係の違いによって意味が変わってくるペアがあるという指摘は、呼びかけ語の位置と意味の関係をミニマルな形で示すことになっており、大変興味深い。

以上のように、本論文は、膨大な時間と労力を要するデータ構築の上に成り立つ実証的な研究であるとともに、方法論の面でも高いオリジナリティーをもち、それぞれの章に明確な発見が見られる。呼びかけ語をどのように研究したらよいかということに対する一つの指針を示したものとして、今後のこの方面の研究の活性化に貢献することも期待できる。ただし、審査会においては、複数の審査委員から次のような問題点が指摘された。それは、研究史を記述した章において先行研究と本研究の関係が十分に明らかにされていないという点、記述の荒さが目立つ部分があるという点、意味の記述にアドホックな部分があるように見える点、各章の結論を有機的につないでさらに大きな結論へと至る努力が必要である点、などである。これらは、いずれも重要な指摘ではあるが、本論文の主張の根幹や方法論の妥当性に大きく影響するようなものではないと考えられる。

審査会では、審査委員全員一致で、総合的に判断して本論文は学位授与にふさわしいものであるという結論に達した。